# 聖者のパレード。β！

アホ田バカ郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖者のパレード。β！

【Ｎコード】
Ｎ０３８５Ｊ

【作者名】
アホ田バカ郎

【あらすじ】
ひょんなことから龍になってしまった凡人高校生、佐々木竜太。劇的な変化にともなって、彼の人生の歯車は突然大きく崩れ出し……。疾走感あふれるドタバタノンストップコメディー。（本作は実験、テスト版になります）

## 1．龍がごとく

我輩は龍である。名を佐々木竜太という。

中略。そんなこんなで我輩は今の龍殺しの騎手に襲われている訳で。

「かっ、かかかか覚悟してくださーーい！！」

竜のしっぽをめがけて鋭利そうな大剣が振り下ろされた……ハズだった。

「えっ！……」

しかし、華奢な体つきの彼女がそれを扱いこなせる訳もなく……空振りに終わる。剣は華麗に空を舞った。

「たっ……助かったか？」

竜は抱えたでっかちの頭を起こして様子をうかがっていた。

この女騎士、鎧こそ立派なものをまとってはいるものの、当の本人は年頃の娘と何ら変わりはない。

「とっとっと。って……うわー！！」

か細い声が再び響いた。剣はまた３６０。回転をなして再び彼に襲いかかる。

「うおーい！　まさかの二段攻撃。てっきり油断しちゃってたよーい」

グサッ！

「はっはわわわわっ……。だだだっ大丈夫ですかぁーー！」

「アウチッ。いでででででぇー！！…ジャストミート！…ささってるささってる！」

竜のしっぽに大剣が刺さり込む。そこからは毒々しい緑色の血が

どばどば溢れ出てきた。
「ええぇっぇーと。とりあえず救急車……。じゃなくて包帯っ」
「あの……なんで刺したの？」
そうこうしている間に液は固まり、止まった。傷は癒えるでもなく、そのまま傷口は広がり……なんと！…しっぽは取れてしまった！
「えっ、えぇーー！」
騎士の娘はたいそう驚いた。かくいう我輩も驚きを隠せないでいる。
千切れたしっぽはみるみるうちに腐りきってなくなってゆく。そして切れた先からは――なんと！――また新しいしっぽが生えてきた！
「これは……トカゲか何かなのか？」
こうしてまた竜は元通りに戻った。まさしくトカゲのごとくしっぽは新たに生えかわっている。

「ごっ、ごめんなさいっ」
一連のゴタゴタが終わった後……。念のためにと、そのしっぽに包帯をぐるぐると巻きつける竜にドジな女騎士は詫びを告げた。深々と丁寧に頭が下げられる。
「いえいえ。っていうか、なんで突然、扱えもしない剣を携えて襲いかかってきたんです？」
彼女がそれに応えようと顔を上げると、長く美しい髪が宙になびいた。
「私、近くの街に住んでいる者なんですけど……。最近、あなた（竜）が街で暴れまわって貢ぎ物をせがみに来るじゃないですか」
「うんうん。って……ちょっと待て」
「はい。なんでしょうか？」
いきなり待ったを掛けられた。話しはじめ、突然のストップに彼女は拍子抜けする。

「そもそも、我輩にそんな物騒な記憶はないのだが」
竜は巻いている包帯をその丈夫そうな犬歯で千切る。テーピングの作業をしながらそう言った。
「えっ？……またまた、ご冗談を」
「それ。たぶん、隣の『桐生さん』じゃない？……最近、街からの来客も多いみたいだし」
「へっ？……さようですか？」
年頃の街娘の、色気の全く感じられない間抜けな声がひとつ。
「ほれ。今、玄関からでてきた。鱗（うろこ）とかしっぽ、ヒゲなんかどう？…あんな感じ？…人違い？」
玄関から出てきた桐生さんを見た瞬間、はっと何かに気付いたような表情を彼女は浮かべる。
「今回はどうもすいませんでした。あっあの私急用ができましたのでこれで失礼します」
せっかちな早口で彼女は言った。舌の根の乾かぬうちに大剣の柄をつかんで持ち上げる。　引きずるようにしてそれを帯同して意気揚々と竜に駆け寄ろうとするその肩を彼は羽交い締めにして引き止めた。
「はわわっ。はっ離して下さいよっ」
「待て待て待て待て。……先ほどは相手が我輩がだったから事なきを得ただけで、次はこ※しゃれるって。冗談じゃ済まない」
抑えた腕の中でもごもごとうごめく鉄の塊をなんとか制する。ミシミシと金属が軋む音がする。
「だっ、だってぇ……。あれのおかげで税金の徴収が厳しくなって、今月も厳しいんですよ」
「見たところ、生まれてこのかた大剣なんて物騒なもの触った事もないんだろ。だったら尚のことヤバいって！……適当に振った剣がかすりでもしてみろ……相手の逆鱗に触れて八つ裂きにされるのがオチだ」
「そりゃぁ。一応、仕留める為にやってますし……そのくらいのリ

スクは」
だんだんとその言葉は弱々しいものとなってゆく。そこは若く年頃の娘とだけあって、自分の身は惜しいのか。
「本職は一撃で仕留めるのがセオリーなの！……それに、最近じゃスナイパーライフルで狙撃するのが一般的だし」
「へぇー。そうなんですか」
彼女の関心と同時に身体の動きはピタリと止んだ。
「後で我輩が素行について話を付けておくから……なっ。今日のところはひとまず」
そういって彼は街娘をたしなめる。羽交い締めを解いて、その肩にポンポンっと2回ほど手をついて彼女をなだめた。
「でで、でもっ大丈夫なんですか……相手は竜ですよ」
「一応言っておきますが、我輩も竜です」
すっかり一段落ついて竜の風貌も解けきってしまった。身なりも普通の青年と変わりがなくなっている。
「さて、まずはふもとの街に降りてだな菓子折りを」
「あぁ。妙に礼儀正しい……これなら大丈夫そうですね」
もし仮にガツンと苦言を呈したところで、逆上した相手に我輩ごときが一対一では到底勝ち目がない。といった事は彼女も心得ているようだ。
「ったりめーです！　桐生さんはS級ドラゴンだからね」
実に勝ち誇ったようにとても敗北感あふれるセリフを彼は言った。
「……わかりました。今日のところは引き返します」
そう言って、彼女は背中に大剣の鞘を結ってくくりつけた。鞘はしっかりと彼女の小さな背中に固定された。鞘は。
なにか、嫌な予感がする。気のせいだろうか。
鞘はしっかりと結びつけられているが、その柄は上向きで空を差

し、宙を遊んだまま。剣はそのスカスカの鞘に納められている。
これに似た光景、どこかで……どこかで目にしたことが……。はっ！　そうだ、ランドセル！　あれだ！
小学生の時の、閉め忘れたランドセル。カパカパとカバーをあそばせた状態でお辞儀をすると、ドバーッと教材が流れ出すやつ。今はそんな状態なのだ！
そして立ち上がった状態の街娘としゃがみ座り込んでいる我輩。まさにお膳立ては完璧。

「今回は、ご丁寧にどうもありがとうございま……」

「まっままま待て待て待て待て！」
慌てて静止をかけるが急には対応できず。時すでに遅し。彼女はその首部を深々とさげた。

「した！！」

重力と遠心力によって勢いよく大剣は鞘を抜け出た。柄先から飛び出したそれは回転しながら空を舞い、再び我輩に襲いかかった。

グサッ！

「うぎゃぁあああああーー！」
山奥で竜の悲鳴がこだました。

## 1．龍がごとく（後書き）

とりあえず仮投稿です。いわゆる見切り発車。

## 弐

ああそうなんだよな。我輩は高校生だから普通に学校にも登校するしたりする。普段から常に強面(こわもて)のドラゴンの姿をしているかというと、実はそうではなくて。自由に人間の姿になれたりする。いや、むしろ逆かな。平素は人間として過ごすことができて、自由に龍の姿になることができる。そんなところだ。

まぁ、面倒かと思うがしばし我輩の身上話に耳を傾けていただけるとありがたい。

我輩が高校に入学した初日。入学式に平静として参列し、高校生として初仕事を終えてその岐路に着いたところ。帰り道でのことであるのよ。

山の上にある我輩の家をゆく道端。緑溢れる道端で……美味しそうなタラの芽を見つけました。我輩はそれを――揚げるとジューシーもっちもち、噛めばほんのりとした苦味があふれ出ることを知っていたから――摘みました。なんの迷いも無く。

さて、この山菜はビール抜きでは語れない。ビール抜きでは味わえないものだから、我輩はわざわざその山を降りて近くのコンビニにまで赴いて、ビールを数缶買ってきましたとさ。もちろん高校生でも飲めるやつね。ノンアルコールフリーの。

さて、家に帰ってその秋の味覚に、ビール片手に舌鼓を打つとどうだろう。たちまちしっぽは生えるわ、角がにょきにょきと姿を現すわで……。

龍になりましたとさ。

後々になってわかったことではあるが、実はそれは「タラの芽」ではなく「龍の芽」という、なんともまぁ胡散臭い代物であったそうな……。お察しの通り、口にした者を龍へと変貌させてしまうと

いう単純明快な食材……。なんかそれに近い展開をどっかの漫画で目にしたことのありそうである。ゴム人間かなにかになった海賊とか。

それからというもの我輩は得てして、竜であることを自覚せざるをえない生活を送ることとなったわけで。

好きだった球団は阪神から中日になった。いいとこまでレベルアップしたＦＦはあきらめてＤＱを？からやり始めなければならなくなったし……。ファミコンだよ？って。ちなみにＦＦ？？はＰＳ３でした。これはもう大変な労苦であったことをご理解いただきたい。

そんなこんなで、高校生活初日――しかも放課後――を無事に越えることができなかった我輩ではある。ドラゴンになったが故にこれから、平和で穏和な日常をあさっての方向に捨て去って、ドタバタと騒がしい日常を迎え入れることになった……。これからの物語、そんな展開であるがお付き合いいただければ幸いである。

## 2.5

――――ザー……。きゅーぅぅぅうんんん。ザッ……ザー……。

しーきゅー。しーきゅー。しーきゅー。全圏に送信します。

聞こえますか？

（時折の電波障害の間に少女の声がする）

きゅうじょようせい。きゅうじょようせい。

こちら洞窟内部。完全に闇に包まれて視界は安定せず。手探りで状況の把握を行っているが、どうやら閉じ込められてしまった模様。

至急救護を要請する。

繰り返す。

洞窟内部で閉じ込められてた。救護を要請する。

（ここで数秒の沈黙があった後、我に返ったのか、少し取り乱したように少女の声は続いた）

誰か、誰か……。

誰か聞こえていますか？

（私たちにとって）幸運にも、この電波を受信してくれた方は、

どうか救いの手を差し伸べて欲しい。お手数をお掛けすることを申し訳なく思います。

聞こえますか？　聞こえていますか？

では、この電波を受信してくれた局があると信じて――しばらく――待ってみることにします……。

以上、送信を終了する……。

ザーッ……。ザザッーー……――――

少女は無線を落とした。真っ暗闇のなかで、ただ、ひやりと手先にさわる小型無線機器の金属の感触だけが確かなものだった。

そうして何もかもが暗がりに落ちた。暗い闇の中で少女は眠る。

## 参

さて、高校に進学して早々大事に見舞われたはずの我輩。
しかしながら、そんなことお構いなしに今日も一日、何の変哲のない平和な日常を過ごし、気がつけばもう放課後。

「佐々木く〜ん。どこ〜？
ううん。（佐々木）亮くんじゃなくて。ごめんね。いや太郎くんでもなくて……。ごめんね。ああ、いいよいいよ。むしろこっちがごめんなさいだよ。……。ごめんねー。圭太くんでもないいんだぁ。忙しいのにごめんね。あっこれから部活？　テニス？　がんばってね……。あぁあーー。ごめんっ。準くんでもないんだぁ。……あっ。武夫くん。おひさぁーー。でも今日は武夫くんでもないんだぁ。ごめんね。えっ。あぁ敦くん。ごm」

いったいこのクラスに佐々木は何人いるのだろうか。

「あっ。いたいた。竜太くん」

佐々木めぐりツアーも終盤に差しかかって、ようやく朗らかな声は我輩（竜太）にかけられた。この前の龍退治の件でお世話になった（？）娘さんである。
実は龍退治にきた女騎士と気付いたら同じクラスになっていた！……なんてご都合主義の学園モノ創作物にはよくあること。深く気にしてはいけない。さっ、次いきましょ。次。

「この前はありがとっ。……いえ、ありがとうございました」

お礼はちゃんと形式的に。というのがポリシーなのかもしれない。

「その節は大変お世話に……あれっ？」

こうやって深々と彼女に頭を下げられると我輩のお尻のあたりにすごく嫌な寒気を覚える。

そこは我輩が龍になったとき、丁度しっぽのあたりのことで、今でもこの間の感触を身体が覚えている。

善行を働いたは良いがもらった後遺症は悩みものであった。

「なったのは私のほうですけどねっ」

その後も意気揚々と流暢に彼女は言葉を続けた。

「でも、びっくりしましたよ。まさか、同じ学校にいて、クラスまで同じになちゃうなんて。これからよろしくねっ」

「こりゃ、荷が重いなぁ……。いやまったく、どんな災難にみまわれるやら」

「いやぁ～。褒めても何もでないよ。佐々木くん」

彼女は頭に手をやって典型的な――漫画とかにもよくあるベタな――照れかくしの仕草をとっていた。

「突っ込んだら負けだと思うので止めときます」

我輩のディフェンスは既に屈強なものにできあがっている。

「でさっ。でさっ。部活。見て回りません？　まだ、入る部活とか

決めてないですよね」

「まだ入るかどうかすら決めてないよ」

「じゃぁ。そうしましょうよ。きっと『自堕落な竜太さん』にもぴったりの活力溢れるところが見つかるかもしれませんよ」

グサッ。

彼女の重い一撃が心をえぐった。そんな無垢な口調で冷たい真実を言わないで……。

その発言は彼女の、子どものように純粋な心からくるものだった。悪びれた様相はいっさいないというのもそれを裏付ける状況証拠のひとつである。

佐々木　竜太　●一〇　茅葺　咲　　１Ｒ　ＫＯ勝ち

総評：ガードを深く構えて守りに徹した佐々木だったが茅葺の強烈な攻撃の前に１Ｒで散る。

てな訳で、ぶらり気ままな旅行番組のようなまったりとしたモチベーションで校舎を徘徊して、手始めに報道部を見学に行くことを思いついた。

「報道部って、学校新聞作ったり、校内放送したりするところですよね」

「別段、機械オタクの集い場って訳でもなさそうだしな」

僕たちは放送室に向かって放課後のにぎやかな廊下を歩いた。

## 四

「で、あるからして！　われわれは報道の何たるかを充分に熟知した上で真実を追究を日々ｋ……」

高校放送部の部長、長橋さんが部活動見学にきていた一年生らに雄弁を述べていた。

今日の一句　『お立ち台（５）／映える姿は（７）／独裁者（５）
作：佐々木竜太』

あまりにも退屈だったので一句煎じてみた。

それでもまだ退屈だったので、近くにいた物腰の柔らかそうな女子先輩部員に声をひそめて話しかけてみよう。

「……せんぱい。せんぱい。ちょっと、いいですか」

「へっ。……わたし？」

女子部員の先輩も壇上の部長を気にしてか、ひそひそ声でささやいた。髪を結んだ、お下げの姿が印象的な人である。近づけた顔に少しの至福を感じたのは内緒。

「せんぱい……。ここの部長っていつもこんな調子なんですか？」

まるで全校朝会の校長先生である。参加した部員にはいつもは式典で来賓用に用いられるパイプ椅子が与えられているのでそれほど待遇は悪くないものの、部員である先輩は立ちっぱなしなので少々気の毒には思う。

「そうそう。……ほんと、困っちゃう」

これが原因で大多数の新入部員を取りこぼしてるようにも思える。

「……入るの、やめよっかな」

その気も無いのに思わせぶりなことをいたずらに発言してしまうのはよくないもの。しかしながら、ちょっとだけ先輩の部員としての勧誘心をくすぐってみたいという思惑もあった。

「まぁまぁ、そう言わずに。……そうだ。後でちょっとだけ機材さわらせてあげよっか」

「ほんとに？　いいんですか。さすが先輩！」

「ちょ……ちょっと佐々木くん」

そんな様子を見かねてか、一緒に見学にきていた咲が話に割って入ってくる。しかしながら彼女の制止も効かず、ただ話は我輩の頭中で一人歩きしてゆく……。

放送室に部長の声が響く。眠たさと倦怠感に押しつぶされそうになるもひたすらにそれを堪えようと、うとうとと悪戦苦闘する同級生。彼らのその様子をひたすら面白おかしく観察するのも、我輩の楽しみの一つ。なんたって午後のこの時間はただでさえキツイからね。享楽の一つくらいは必要さ。

「先輩。これ、何をする機械なんですか？」

報道部部長の演説も終わって、見学に来ている一年生のしゃべり声と部員の段取りを話し込む声とが入り混じり合う放送室はざわざわと、にぎやかな喧騒で埋め尽くされた。

「あぁ。それね。それは、校内放送に使うやつじゃなくて……。えっと。ちょっと、待ってね」

先輩は他の部員に声をかけて話し込んでしまった。

「佐々木くん。何してるの？　部長さんが実際に校内放送の実演やるらし……。って、ナンデスカ。この黒くて古そうな機材は？」

ちょうど、放送室をぶらぶらと歩き回っていた咲が戻ってきた。彼女もこの機材には少しばかり興味があるのかもしれない。

「ごめんごめん。お待たせ。それね。無線機らしいよ。とはいっても、使い方は私も分からないのよねーー」

どうやら、これは部員が手に触れることもなく、静かにわた埃をかぶってしまっている代物らしい。

「ふーん。なるほど。そうなんですか……。ちょっとこれ、触ってみてもいいですか？」

「だめだよ佐々木くん。無理言って先輩困らせたら」

すかさず咲がそれを制止にかかった。困った子どもを諭す保母さんのそれと同じ口調で。

「えーーっ。壊しちゃったら怒られるの私なんだけど。……とはい

っても、さっき約束しちゃったしなぁ。……しょうがない。壊さないようにね」

「さすが先輩っ。そこに痺れるあこがれるーー」

我ながらおべっかが下手だ。我輩、馬鹿かもしれない。

「おだてても何も出ないわよ……。まったくね。じゃぁ、私、他の部員に手をやかないといけないから。適当に遊んだら、もとの状態に戻しといてね」

先輩はそう告げるとこの場から去った。今はそのあたりを巡回している。

「やーい。やーい。佐々木くんのぶぁーか。バーカ！」

「君は人の心が読めるのか！？　ってか、なんで茅葺にそれを言われなきゃいけないんだよ」

さきほどの保母さんは一気に幼児返りをしたようだ……。

## 伍

モノログチューンの丸いつまみを適当にまわして、入る砂嵐を楽しんだ。変化する雑音の中から拾える声を探していた。そうやって適当に放送を受信していた。

「ふーーん。なーんかつまんないね。砂嵐ばっかりで……。佐々木くんの人生みたい」

「すんげぇ重い発言をさらっと言いますね……。一言で我輩の人生を全否定しないで下さい」

確かに我輩の人生はつまらない。だけどそんなこと今言わなくてもいいじゃん。

『ザッーーー。ザーー。キュィイイーーーイイイン。キュゥーーーーーン。ザザッ……。ザーーー』

無線機はひとり唸(うな)っている。

「そんなに暇か……。まぁ、確かに砂嵐ばっかだから、当然といえば当然か。もう仕(しま)舞いにして片付けるかな……。それとヒトコト言わせてもらえるなら、我輩の人生だって充実している瞬間くらいあるわい、と我輩は言いたい」

『ザザッーー。キュォーーーン。ザーーーァ。ズズズ……』

これでおしまいというだけあってつまみのコックをゆっくりと最

後まで回してみる。

『ザザァーー。ザーーーーーァ……しーk……ザァーーー。キョーーーン。ザーーー』

「声？……。佐々木くん。今、なんか聞こえたよ」

「ホントに？　ラジオかなんかかな？　それとも近くで無線を飛ばしている人がいるとか」

思わしき場所は通り過ぎたので、とりあえずチューンを逆向きにまわして戻してみる。ゆっくり。ゆっくり。砂嵐から声が現れる部分をたぐって、だいたいの察しがついたらその音がクリアになる場所を探す。

『サッーーーー。サァーーーーッ。……けんに送信します。聞こえま」

「はい。そこでストップ」

つまみを回す我輩に、咲はあわてて待ったをかけた。どうやらその場所を見つけたらしい。

「よかったじゃん佐々木くん。繋がったね。前言撤回。この無線、凄くオモシロそうだよ。これでつまらないのは佐々木くんの人生だけだね」

「うん。ありがとう。全然素直に喜べないやぁ」

満面の笑みでその言葉を受け取った。ちくしょう……。

『――救助要請。救助要請。私は今、助けが必要なんです――』

「どういうこと？」

彼女がこちらを顧(かえり)みて真顔でそんなことを聞いてきた。無線機からは少女のか細い声が聞こえる。

「さぁ……。とにかく、もうちょっと聞いてみよう」

ただ、無線機が語るのを聞く。

『――こちらは白峰山の穴熊洞内部。現在、その洞窟内部に閉じ込められている。至急、救援が欲しい――――』

僕たちは顔を見合わせた。どうやら事は思った以上に深刻らしい。

「どどっど、どうしよう。はわわっ。はわわわわわっ。とりあえずケーサツ。ケーサツに連絡だよぉう」

「おっ、おちつけって」

「ケーサツ。ケーサツ。１１７……１１７」

咲は制服のポケットから携帯電話を取り出すとあたふたとボタンを入力して我輩に渡した。……なぜ我輩に渡す？

『ピッ。ピッ。ピッ。ポーーン。ポーーン。１５日。午後４時。２５分。ちょうどを、お知らせします。ポーーン。午後４時。２５分。１０秒を、お知らせしま』

ピッ。ボタンをひとつ押してその携帯をたたむ。

「うん。今、４時２５分だそうだ」

「じほぉーーーーー！！」

彼女は渡された携帯電話を自身への失意からくるブルーな気持ちで受け取った。

「はわわわわっ。……ええっと。そうだ１７７だよ。１７７」

再び彼女はあわてた様子で番号を入力すると、我輩にその電話を渡した。……だからなんで我輩に渡す？

『……続いて、○×地域の予報です。明日、日中は　晴れ　でしょう。夜は』

ピッ。我輩は耳もとにあてていたそれを外して電話を切ると、制服のポケットへとしまった。

「明日、傘いらないって」

「ヨホォーーーーっ！！」

「ｙａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ！　ｏｈ　ｙｅｓ！」

「ｙｅｓ！……って、もぉええわ！　ご清聴、どうも、ありがとーございましたぁーー」

周りからは拍手喝さい。一連の漫才を目の当たりにしたギャラリーらしい。しかしこうした茶番をしている間にも、刻一刻と事態の緊急性は高まる。

「うーーん。とりあえず、こちらから応答の送信をしたいんだけど、その方法が分からないからなぁー」

「そうよね。でもまず警察に連絡するのが先決だと思います。ということで携帯返して」

彼女は我輩に対して手のひらをさし出した。その瞳はじっとポケットのふくらみを捉えている。

「そうするにしても、せめてその人の名前くらい分からないと相手にしてもらえるかどうか……。いやでーす。この中には山口さん（クラスの同級生）たちのメルアドとか入ってるんでしょ？」（※ここから前半と後半を切り離してご一読ください）

我輩は冷酷非情にもその手をぺちんとはじき返した。明らかに道理に反する行為ではありますが、つまらないと称された人生にはこれくらいささやかな意地の抵抗があっても良いとは思いませんかね？　なんせ目の前にはそのスパイス、出逢いとお近付きの糸口があるというのですから。

「そうかぁーー……。じゃぁ、どうするべきなんだろ？　早くしないと、もしものことがあったら……。とりあえず下心むき出しで話してくれた佐々木くんには残念だけど山口さんはフィルタリングしてるから仮に佐々木くんがメルアド知ったところで、きみのメールは届かないよ。永久に」

あれやこれやと、この緊急事態をどうにかして切り抜ける、解決の糸口を模索する話し合いが行われた。僕たち私用の他愛のない会話と同時並行で。ぶっちゃけこんなくだらない話と同時並行なんて不憫すぎると思います。

「とりあえず現場に行ってみて何か手がかりがつかめたら警察を呼ぶ、って方がいいと思うけど……。えっ、そうなんですか、じゃぁどうすればいいんですか教えてくださいお願いします」

永久に届かないこの想い。それどころかフィルタリングにはじかれたそのメールは即削除ですよね……。やるせない。

「おちおちそんな事してて大丈夫なの？　それに、白峰山ってかなり広いんだけど……。…それなら、私の携帯返してくれたら山口さんに佐々木くんのアド教えてあげよっか？」

「白峰山は広いけど、穴熊洞自体はそんなに広くはないからね。周辺の捜索もそんなに手間や時間はかからないと思うよ……。あっ、はいぜひともよろしくお願いいたします」

ポケットから携帯を取り出して――なるべく丁寧に――それを彼女の手のひらに乗せた。

「そっかぁー。まぁ、行くだけ行ってみよっか……。ひっかかったな、嘘に決まってんじゃん佐々木くんのバーカバーカ」

こうしてひとつの結論に至った。僕たちは案外器用だと思った。

## 陸

午後４：５０。白峰山ふもとにて。

僕たちは無線で、見ず知らずの送信主からあるメッセージを受けた。そのメッセージとは、白峰山内部の洞窟に閉じ込められてしまったため大至急救援が欲しいというものであった。

「案外、白峰山って学校から近いんですね」

咲は眼前にそびえる山の頂を見上げながら言った。

「トホホ……。手痛い出費だよ」

泣き面で中身の涼しくなった財布をポケットへと仕舞い、買い物袋から取り出したのは一つの小型無線機。ここへ来る途中で近くの電気店に立ち寄って購入した。アマチュア用の代物である。

「ほーらっ。泣かない、泣かない。これで散らばった７つのボール全部集めて願い事、叶えてもらえばいいじゃない」

「これレーダーだったのっ！？…ねぇっ！？……これドラゴンレーダーだったのっ！？」

咲はあざとい不適な笑みをフッと浮かべるだけでその問いには応じなかった。

問題の場所に着いたは良いが、あたり一面、本当に何もない。ただ、青々とした生い茂る『緑』が続くだけであった。けれども何かしら行動を起こさないと、刻一刻とすりへっている命があるにも関わらず何の手段も尽くさなかった……、という取りかえしの付きそ

うもない罪悪感に押しつぶされてしまいそうだったので行動を急いだ。

「ホント、何から始めればいいのか……」

「とりあえず、穴熊洞の入り口に向かってみようか」

「まぁ、そういうことになりますけど……。それってここまでのやりとり、全否定ってことですよね？」

そうだ。確かに。こんなシーン、始めからいらんかったんや！

「恐縮ながら……そのようです」

この一連の徒労によって、天から降ってくる雨だれのように疲労感がどっと押しよせてきた。これぞスターマイン疲労感……。

整理された山道を歩く間は、さきほど買ったばかりのアマチュア無線機のつまみをひたすら調整していた。

『ザザッーーー。キュオーーーン。ウォォォオオン。ウォォォオオン。ウォォォオオン』

「ううん。さっきの局番号、ちゃんとメモしておけばよかったね。二度手間だよぉっ。まったくね。誰かさんの人生に似てるねっ。てへっ」

そいつは聞き捨てならない。しかも、ちゃっかりぶりっ娘ポーズまで決めてなさるから器用というか、何というか。無性に腹が立つというか……。

「はいはーい。カワイ娘ぶってもだめですよーー。ちゃんと聞こえました。今のはアウトですよ」

「べつにぃーー…。今のは誰かさんの事であって、佐々木くんのことではありませーん」

きっ、きたない。さすが茅葺さん汚い。我輩は彼女の撒いた餌にまんまと釣られたわけなのか。こんちく（しょう）。

ここは一つ、街一番の淑女と名高い私が今後の人生のために社会の厳しさを教えてあげたほうがよさそうですね……。

「きゃー。むきゃつく。そういう態度が鼻につくって分からないのかしらこの小娘が！」

言ってやったわ。それこそもう、ガツンとね。これ以上ないくらいにね。やだ、私としたことがはしたない。

「べつにぃ。年増のオバサンにゆわれてもぉーー。ぜんっ……ぜん、悔しくないですから。だから、どうぞ続けてくださいねっ。オバサマっ。きゃは」

「おっ、おっ、おばっ！？……。なんて性の悪い小娘なのかしら。きぃいーーー。悔しーいっ、覚えてらっしゃいっ」

あれっ？　これって……典型的なやられ役？　　結論：全ては仕組まれていた

『キュウォーーン。ザザッ。スゥーーーー。……しーきゅー。……

しーきゅー』

やっと無線の局が繋がった。おそらく彼女も恒久的に放送しているのではなく、定時的に放送しているはずだから、たまたまこの時間で引っかかったのはラッキーだった。

『――救護要請。救護要請。洞窟内部の探索を行っていたところ、閉じ込められた。至急救護を要請したい――』

「佐々木くん、佐々木くん。つながりました。こちらの局から送信しましょう」

（※実際に無線を送信するには免許が必要です）

やっとつかんだ糸。ここで離してしまうわけにはいかない。

「えぇと。そうだね……。よし」

まだまだ稚拙ではあるが、なんとか回線をとって相手側にメッセージを送ることができた。

『V・V・V……。こちらは昨日、あなたの放送を受信した局です。その有志が今、あなたを捜索しています。あなたの局名を教えてください……。本名、フルネームで』

数秒の間があって、返信がかえってきた。この時、少女はなにを思ったのだろうか。

『交信、感謝します。通信を続けてください。当局はオクヤミ　レイコ（本名）です』

『では、あなたの局はどこにありますか？……場所を教えてください』

『○×県、△市、白峰山穴熊洞の内部です。どうぞ』

『こちらの局は今、白峰山穴熊洞付近で、あなたを捜索しています。あなたは北側から入りましたか？　南側ですか？　それとも東側ですか？』

『えっ。えーーっと。あっ……あれ？……おっ、思い出せない……』

思い出せない、とはいかに。何らかの衝撃でも受けて、記憶を失っているのか？……それとも最初からただの狂言だったのか？……いや、それならば無理やりにでも選んで、嘘をつき通すはず……。

『では、白峰山の穴熊洞で閉じ込められて動けない、というのは本当ですか？』

『C。そうです。至急、助けが必要な状態にあります』

『では、その確証がとれたので、大至急警察に連絡して捜索隊と救護を向かわせます。これで無線を落としますが、引き続きこちらの局は待機をしています。また、何かあればどうぞ』

『……助かりました。私の放送を受信し、紳士的に救護にあたって頂けたことを深く感謝します。今回は、本当にありがとうございました。……では、（無線を）一時落とします』

ガチャッ。無線は落とされた。赤く染まりつつある空を見上げて、少しの達成感を味わった。緊張の糸がほどけたのか、額からは一筋

の汗のしずくが肌の上を這っている。

そうして、舌の根の乾かぬうちに我輩は警察に電話をかけた。

「結局、ここまで来た意味……なかったね」

「あぁ……そうだね」

沈みかけの空が少し悲しげに見えた。

「そうそう、ひとついいか？」

「うん？」

「我輩の人生は二度手間じゃない」

「へー。そう……。でも、通報はさっきので、三度手間だったよねっ！」

「……誰かさんのおかげさまで」

「ちょっ……。その言葉、聞き捨てなりませんっ！……まったくっ」

# 七

『……アー、アー。局番△○×。応答してほしい』

『こちら局番△○×』

呼び出しから数秒の間隔があって相手は応えた。

『諸事情により手配していた警察が来れなくなった。こちらで貴局を捜索するので、明確な場所を教えて欲しい』

その言葉をそばで聞いていた咲はすかさず地図を広げた。なかなか気が利いている。

『申し訳ないけれど、それすら分からない……。どうぞ』

『何か、ささいな事でも良いんだ。覚えがあることを、教えてくれ』

『蓮。……蓮華。……入るとき、小さな池を見ました』

その言葉を聞くや否や彼女はその該当箇所を赤く塗りつぶした。結果、そこは綺麗に血の池となった。行動を尽くしてくれたことは助かるが、心もち縁起が悪い……。そういうところは少し抜けているのが彼女の特徴のひとつ。ご愛嬌だ。

『わかった……。なんとかあたりを付けてみる。また、連絡をしたいので、そのときは頼む』

『……ありがとう。ご尽力に期待します』

無線は落とされた。空は赤く染まりかけている。急がなければ……。

本来、洞窟は穴熊小山を母体としたもので、高度経済成長期で閉山した鉱山のひとつである。入り口は3ヶ所。北口、南口、東口。全て貫通せず行き止る。その中で、洞窟の入り口付近に池、もしくは水辺があるのは。北口と南口。

「何としても今日中に探し出そう」

「……うん」

私たちはまず、ここから一番近い北口に向かった。

## 八

北口。近くに小さな池、というか沼がある。蓮の花はまだ見受けられないが、近くで蓮根を育てているらしい。

「ここ、入るの？」

洞窟の入り口はバリケードで閉鎖されていた。ただ、それは形式的なもので、実際には簡単に通れるようになっている。現に、閉鎖されてから人の立ち入った跡が所々に見受けられた。

「まぁ、そうなるだろうな。……よいしょ、っと」

そう言ってみせて、我輩は鉄柵によじ登って柵の向こう側へと乗り込んだ。

「ちょっ、ちょっとぉ……」

咲は上目遣いでそれを眺める。

「ああ、気が乗らないんだったら、そこで待っててよ。ちょっと調べたらすぐ戻ってくるから」

「それは間違いなく佐々木くんの身に何かが起こるフラグなんですけど」

「じゃっ。じゃぁ。そっちに行くから…。…ちょっと、……あっち向いてて」

語尾はみるみるうちに弱いものとなっていた。

「……えっ、ナンデ？」

恥じらいのようなものがあったのか……。どうやら、彼女は穿いていたスカートがめくれ上がることを気にしているらしい。なかなか抜けているようで、それらしいところもある。

さりげなく置かれている彼女の手が、穿いていたスカートを軽く押さえつけていることを竜太は気付かなかった……。

「い～～い～かーーらっ！」

「あっ、あんなところにアームストロングメガホワイトオオトカゲが！」

彼女はビシッと洞窟の奥、暗闇の方を指差した。

「……あっ。ホントだ！……うわぁー、やっぱすげーな。初めて生で見たよー、アームストロングメガホワイトオオトカゲ。感動した！」

ズザーッ。

彼女はベリーロールで柵を飛び越え、きれいなヘッドスライディングで竜太の前を滑って通過した。

「だから何！？…アームストロングメガホワイトオオトカゲって！……一体どんな進化をとげた霊長類だったの！？」

バサバサと衣服についた土埃を払いながら、瓢箪から出たその駒、未知の動物にまずツッコミをかました。

おや？

アームストロングメガホワイトオオトカゲはこちらを気にかけているようだ……。

アームストロングメガホワイトオオトカゲ　が　仲間になりたそうにこちらをみている。

「いやー。悪いなぁ……。今我輩はぐれメタル探してんだよ」

ピッ。

「えっ。…いいの！？…確実にレアモンスターでしょ、アレ！……むっちゃ強そうなのに！……ほら、さびしそうに帰ってくよ。…意外と幸せの青い鳥って身近にいるモノなんだよ！？」

アームストロングメガホワイトオオトカゲ　は　その哀愁漂う後姿を僕たちに向けて、暗い闇の奥へと去ってゆく……。あっ、今、火吹いた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0385j/

---

聖者のパレード。β！

2010年12月16日14時47分発行